

日系アメリカ文学におけるある劇作家の意図について

— Wakako Yamauchi の作品を通じて —

The Intent of the Dramatist in Japanese American Literatures

— from the works written by Wakako Yamauchi —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

筆者はこれまで長年にわたり日系アメリカ文学の研究、特に日系二世の文学者の作品を研究してきた。これは、1988年の市民的自由法の研究の際に生み出された作品が多くを占めていた。さらに、2003年、2004年にかけて、日系アメリカ人三世の文学作品を研究することで、今までと作品のモチーフと大きく異なる新しい展開を探ってきた。このような文学の歴史を研究する中で、年を追うごとに女性の作家の活躍が目立つて来たことに注目した。そこで、その理由について歴史的な動きの中で探ることにした。その結果、初期の日系アメリカ文学はほとんど男性によって描かれており、それは昔の日本の男性像に比例するように、男性の目から見た作品であり、女性の本当の姿、特に内面について正しく描かれていないことがわかってきた。この点について実際の日系社会の女性の姿、特に本当の彼女たちの内面を伝えたいという一部の女性によって、日系アメリカ文学に女性の作家が多く現れていくきっかけになったという見解を得るにいたった。^{註1}

そこでこれを裏づけるため、改めて日系アメリカ文学の中の二世の女性の作品を調べて

いく中で注目したのが、Wakako Yamauchi である。彼女は、現在劇作家のグループに分類されるが、彼女が何故文学作品を書くようになったのか、そしてどのような意図を持っているのか調べて行きたい。また短編小説の中から、劇の脚本に書き換えられたものが多くあるので、その中で劇の脚本ではどのように書き換えられているのか、また劇の中でどのような言葉を登場人物に語らせているかを比較していきたい。

1 Wakako Yamauchi について

Wakako Yamauchi は、1924年10月25日にカリフォルニア州ウェストモーランドで、Wakako Nakamura の五人兄弟の3番目として生まれた。(しかし実際はもう少し早く生まれていたらいい。) 彼女の父 Yasaku Nakamura は、静岡県清水市出身の一世だった。父の家はかまぼこ屋で家を継ぎたくないという気持ちや軍隊に入りたくないという思いがあり渡米したという。彼女の母 Hamako Machida も又静岡出身である。母の家庭も当時貧困に見舞われ、Yasaku と結婚してアメリカで富を得て日本に帰るつもりであったという。Wakako は、日本の伝統の下で育

てられた。外ではアメリカ人として、家では日本人とし育てられた典型的な二世である。父は小作農者として働き、後に移動労働者のためのホテルを経営した。1942年、フランクリン・D・ルーズベルトが強制収容所に日系人を送ることを決めた時、Wakakoは高校2年生だった。当時、西海岸には12万人の日系人が住んでいたが、10の強制収容所に分けて入れられた。彼女と家族は、アリゾナ州のPoston 強制収容所に送られた。Wakakoの父は、収容所に送られる直前に会社を倒産させており、何もかも失い失意の中での生活だった。

一方 Yamauchi は、収容所の中で、Poston Chronicle のレイアウトをする仕事をしていた。その Poston Chronicle 中には、二世のアメリカ文学者の Hisaye Yamamoto がいた。Wakako は少し年上の彼女の影響を受け作家活動を始めた。Wakako は、もともと芸術家か作家志望だったが（Yamauchi, *Living in America as a Nisei Writer*, 1), このことも、当時の日系アメリカ人の女性としては、かなり珍しいことといえるだろう。

その後、Wakako は、「忠誠書」に署名をして、1944年から1945年にかけて収容所を出てシカゴの菓子工場で働くことになる。しかし、1945年父が収容所で亡くなり、再び収容所に戻るようになった。父が死んだ後、その後の計画が立てられず、多くの人に遅れて弟と母を連れて、サンディエゴに移り住み、写真の現像の仕事をした。^{注2}

そしてしばらくして一人ロサンゼルスに渡り、Hisayo Yamamoto の家に住み、Otis Art Center で夜間学校に通い絵画の勉強をした。ここで夫である Chester Yamauchi に会うまで、白人の中でたった一人の日系人として勉強するのである。Chester Yamauchi の家族は、Wakako の兄と知り

合いだった（兄は、忠誠書の署名を拒否したことで Tule Lake に送られそこで知り合ったということである。）ので、親しくなり1948年に結婚する。

結婚後は、UCLA で政治学を勉強する夫を支え、Yamauchi は、作家になりたい、芸術家になりたいという野心を後まわしにして、さまざまな仕事をする。1955年娘 Joy が生まれ1965年まで17年間住んだロス・アンジェルスに移り、Gardena に引っ越した。そして1958年からは作家としての活動も再開している。1959年の初秋に、ヘンリー・モリが Poston Chronicle で「羅府新報」のグラフィックデザイナーとして彼女を招いた。このとき夫のアドバイスもあり、自分の作品を出版させてくれること条件に、この仕事を引き受けた。一人の妻であった Yamauchi は、1960年から1974年まで「羅府新報」に物語を書いた。（Yamauchi, *Song My Mother Taught Me* 1-5）

2 Wakako Yamauchi の作家活動について

「羅府新報」の中に掲載された作品に注目したのが、中国系アメリカ人の文学作家の Frank Chin であった。彼は、1974年他のアジア系作家 Lawson Fusao Inada, Jeffery Paul Chan そして Shawn Wong とチームを組み *Aiiieeee* というアンソロジーに載せる作家を選んでいった。その一人に Wakako Yamauchi が選ばれたのである。この中には、John Okada, Hisaye Yamamoto, Toshio Mori という他の日系二世の作家が含まれていた。1975年に離婚した後、彼女は、フルタイムで作家活動をした。その時、East-West Player のアートディレクターの Mako に声をかけられて、彼女の作品 *And the Soul Dance* を劇作品に書きなおすことになった。

さて、ここで Wakako Yamauchi が「アメリカ太平洋研究」の雑誌の中で書いている内容に注目してみたい。この中では、自分の生い立ちが書かれている。その内容は、先に述べた内容と重複するので触れないが、自分の作家としての考え方に触れているのでその点について考えていきたい。このエッセイの中で、このように述べている。

「私は、ほとんどすべての人が作家になれることがわかった。大切なことは、言葉を愛すること、そして話したい物語を持つこと、あなたが述べたい意見を持つこと、そしてそれを語りたいと思う強さと情熱である。そして、読者が『ああ、あの感情がわかるわ。』という方法で書くことである。」(Yamauchi, 2)

さらにこのようにも書いている。

「私は、もっとも簡単な方法で書くを選ぶ。簡単に理解できる言葉で、誰にでも一般的な感情で、私自身のような普通の人の生活状態や問題を展開するのである。つまり私たちみんなが知っている事、戦いである。つまり愛、憎しみ、嫉妬、怒り、悲しみ、喜びである。私は自分の知っていることを書く、それは二世の生活である。私は、私に関心を待っている短編や劇を書く。私たちの遺産や子供たちのことを書く。私の作品はすべてほとんどの二世が分け合う問題や状況からできている。私は、自分が描く人に対して真実を伝えたい。」さらに次のような描写もある。

We as human beings are not born from seeds drifting on a wind like all animals we have genes, we have ancestors, but we also have historical and cultural backgrounds that make us think and feel the way we do, which decide the roads we take. These decisions are sometimes unconscious, sometimes very deliberate. True life

follows the pattern of cause and effect. True stories are carried over a span of years and generations, and cause and effect are of ten hard to trace, and are lost in the dust of ages. And who cares? We're born to people through no choice of our own; we often carry their neuroses; we do the best we can under the circumstances and do not always question the past that is responsible for the present and the future. Fictional lives also are woven from cause and effect. Whose stories and plays can be drawn from just five minutes of a situation or can stretch over generations, but cause and effect must be established quickly and clearly. That's what draws our readers into our world and helps them to understand the dilemmas, the triumphs, the heartbreak and the joy. (Yamauchi, 15.)

また、作家になるきっかけについて Hisaye Yamamoto との出会いの大きさについても語っている。彼女の作品を読み、その作品を通じて、信じて自分の夢について準備すればどんなことも可能なことを教えてくれたと語っている。そして一番重要なことは、次の内容である。

「自分の両親や親戚から聞いた三世が書いた物語や劇はたくさんある。またいくらかは白人によって書かれている。二世はあまり物語りは書かない。二世は芸術ではなくもっとしっかりした地位につける職業についている。」

日系二世が過去の差別の体験から、少しでも高い地位につけるようにがんばってきたということは、日系人の歴史について研究しているときによく聞かれたことである。そんな中で Yamauchi は何とかして自分の手でありのままの日系人の姿を文学の中で伝えよう

としたのである。仕方がないという日系人特有な表現を「12-1」という劇で収容所の生活を表現している。そしてこの作品は、East West Players が1982年に劇化した。この劇を見に来ていた Ozaki Hiromi は、日本語に翻訳してこの作品を日本で上映することを Yamauchi に求めたのである。こうして彼女の作品は日本でも多くの人たちに見てもらうチャンスをつかんだのである。

少女は結婚して子供を生んで育てるものだという日本の当時の社会と同じ価値観の社会に育った Yamauchi は、作家になるとは考えていなかったという。それは、単なる夢であった。しかし、多くの出会いの中で彼女は、夢を現実のものにしていく。仕方がないとすべてを受け入れて生きてきた日系人の姿を、強い気持ちで世の中に知らせていくのである。それでもやはり、白人社会に立ち向かうには多くの困難があった。And the Soul Shall Dance を書き上げた後、いくつかの主流の雑誌に投稿したがいつも認められなかったという。このようなことは、多くの日系人作家が体験したことである。ここで挫折する作家が多かったが、Yamauchi は、白人の社会で認められることをあきらめ、自分のできる限りアメリカにいる日本人について書き続ける事を決心するのである。この決心が我々多くの人たちに真実の日系社会を伝えるきっかけになるわけであるから、大きな決断だったといえよう。

Yamauchi は劇作家になることには不安もあったようであるが、日本で自分の作品が上映されることになったとき、彼女は次のように結んでいる。

「私は、この作品が本当の言葉を見つけることができたことを誇りに思う。もし私の両親が生きていたら是非この作品を見てほしかった。この話が語られるまでには長い時間がか

かった。私は、どれほど一世が自分の生まれた国を愛し、なつかしく思っていたかわかってほしい。彼らの心の中で、いつも日本は彼らの帰りを待っていたのである。もし少しでも一世が生きていてくれて、この物語を見て喜んでくれば、きっと生きる活力になったであろうに。」(Yamauchi, 4)

この言葉からわかるように Wakako の作品は、日系一世を中心にした当時の生活を表現しているのである。次に彼女の主な3つの作品を通じてどのような表現でこのメッセージを伝えているのかを探って生きたい。

3 Wakako Yamauchi の作品

And The Soul Shall Dance この作品では語り手である Yamauchi の目から見た母と Emiko Oka の生き方を描いている。Emi は、Oka の後妻である。Oka は養子に入ったが虐げられた生活に嫌気がさし、渡米し財産を得て独立するため日本に妻と子供を残していたが、その間に妻が亡くなった。そこで妻が亡くなるとすぐ、妹の Emiko がアメリカに送られたのである。評判の悪い男と付き合っていた Emiko は、親戚や家族の反対にあい、別れさせる手段として好都合だったのである。Emiko は、アメリカについてから、決して幸せではなかった。いつも一人で歌を口ずさみ踊っていた。タバコを吸いお酒を飲み夫の所有物になることを拒む。さらに日本からやっと呼んだ娘の Kiyoko の母になることも否定する。このような態度は、日本人に対するアメリカ人のイメージをまったく覆すものだった。さらに Emiko は学校教育を受け、文化的な教育も受けていて女性としては特別な立場の者として描かれている。一方で Masako の母は、典型的な日本人女性として描かれているのである。しかし、作品の中で、Masako の母は、Emiko の生き方を全面的

に否定しているわけではないのである。自分の気持ちに素直である Emiko の生き方は、仕方がないとすべてについてあきらめてきた多くの日系一世にとってあこがれでもあるのである。

過去の恋人をあきらめられない Emiko は、踊りを通じて心を慰め、恋人とのつながりを感じているのである。そして語り手の Masako は日本人的な女性像に反発を感じており、年の近い日本人のイメージにあてはまる Kiyoko より、Emiko に共感しているのである。しかし、この Emiko もある春の日に突然死んでしまう。夫と Kiyoko が強い結びつきで描かれる一方で、日一日と孤独になり悲しい結末を迎えるのである。

一方劇の中では、当時の日系人の本当の声、姿を多く描いている。Masako の父の Murata は、「お金をもうけること、故郷に戻ることに、そして王様のような暮らしをすること、それがみんなの夢である。」と語っている。

また登場人物に浴衣を着せるなど日本文化との強い結びつきを持った日系社会を演出している。さらに Masako のかけたレコードの歌を聴いて Emiko は顔を出しその音楽にあわせて踊り始める。Emiko は、その歌を聴くと日本を思い出すと語っている。

My home.Japan My real home.I'm going back one day.

Emiko は、Masako にそっと打ち明ける。そしてそんな Emiko に対して Hana は次のように語っている。

She can't adjust to this life.She can't get over the good times she had in Japan. Well,it's not easy.But one has to know when to bends…bamboo.When the winds blow,bamboo bends.You bend or crack. Remember that,Masako.

Hana は、Emiko の生き方に同情をしているのである。それでもアメリカ社会で生きていくには、我慢つまり、「仕方がない」という気持ちがなければ生きていけないことを Masako に語ることで、観客にも伝えているのである。

Hana は、Kiyoko にもこのように語っている。

Sometimes …sometimes the longing for home …the longing fills me with despair. Will I never return again?Will I never see my mother,my father,my sistera again? (Wakako Yamauchi, *And The Soul, Shall Dance*, 175)

これは多くの日系一世の望郷の思いを代表した言葉といえるだろう。また注目したいのが Oka の言葉である。彼の言葉から、外国入土地法について語られているのである。

In America Japanese cannot own land. We lease and move every two to three years. Next year we are going to go someplace where there's young fellows. There's none good enough for you here. Year. You going to make a good wife. Already a good cook…

これは娘 Kiyoko に向けた言葉である。(Yamauchi, *ASSD*, 200)

この劇の最後で、Masako は Emiko が夜遅くに踊っている姿を見かける。絶望の中で踊る姿に Masako は強い印象を受ける。こうして劇は幕を下ろす。Emiko が亡くなる描写はない。短編の中では行間の多くの言葉が隠されていたが、劇の中では今述べたようにはっきり人々の苦しみ怒り絶望が語られているのである。

Music Lesson この作品の主人公は Kao ru である。彼は未亡人で一人で農業の仕事を手伝

うようになり、そこで Chizuko とその娘 Aki との三角関係になる。先に述べたように、夫に従属することが当たり前だった日系社会の中でこのような関係を描くことは、やはり日系人に対する固定観念の打破が意図的に感じられる。未亡人の Chizuko は、バイオリンを片手に現れた Koru の日本人離れた雰囲気に惹かれて行く。一方 Aki は、バイオリンのレッスンを受けるうちに Kaoru の大人の魅力に惹かれていくのである。つまり、Kaoru は日系一世の固定観念から離れた人物像なのである。

さらに登場人物の中には、二人の息子 Ichiro と Tom がいる。この二人は、一般的な日系二世として描かれている。勉強に熱心で、仕事もまじめに取り組み、いつか豊かな生活ができるように前向きに生きようとしているのである。物語の後半で、Aki が Kaoru への愛を語り母の行き方を否定して Kaoru と共に家を捨てると言い出す。母 Chizuko は、Kaoru を激しくののしるが、最後には好きにさせようとする。しかし、Kaoru は、Aki がついてくることを許さず一人家から出て行くのである。

劇の中で、注目したいのは、Chizuko が、Kaoru に、「勉強で人に遅れをとって欲しくない。」という言葉である。日系一世の二世に対する願いは、白人に負けない仕事につかせること、つまりいい教育を受けさせることであった。そこで、劇の中でもこの言葉を組み込んだのであろう。

さらに、Nakamura という Chizuko の近所に住む男性と Kaoru の会話の中で、外国人土地法についても語っている。これは、先の *And the Soul Shall Dance* の中でも語られている。土地を所有できないことがどれほど日系一世の生活で苦しみの原因になっているかを知らせたいという Yamauchi の強い

意志が感じられる。そしてそれを知らなかった Kaoru の現実に対する甘い認識がその後の物語の鍵になっている。

Chizuko は、Kaoru に次のように語っている。

When I left Japan I never knew it would be like this. The babies came so fast...and me, by myself, no mother, no sister-no one-to talk to. I was so young...never dreamed it would be like this. Never through my life would be so hard. I don't know what it is to be a...a woman anymore ...to laugh ...to be soft ...to talk nice...

I keep thinking life is hard. I should not let them think it would be easy. (Wakako, Yamauchi, *The Music Lesson*, 74)

ここでも日系一世の現実に対する絶望の気持ちが語られているのである。

また Akiko が Kaoru と家を出ると言った時、Chizuko は次のように述べている。

You know what you're asking for? From town to town...throw you out...leave you in some dirty hotel for another fool woman. Thank, Aki. And you'll come crawling here (me)

これは、Chizuko が日本を離れてアメリカに渡ったことへの比喩にも思えるだろう。これに対して Aki は Chizuko に対して生活の変化を求めていると非難する。この状況に甘んじているというのである。だが、Chizuko はこれに激しく抗議する。

You believe that? You believe this is all I want? That I lived with a man I hardly knew, didn't understand, didn't respect because (I)... (Wakako Yamauchi, *TML*, 92)

又、Aki が父親を愛していなかったと言うと、Chizuko は「どうして愛することができたのか？自分よりはるかに年上の老人を。」

と答えている。この言葉も大きな意味があると言えよう。写真花嫁としてアメリカに渡った多くに女性は、夫が話とあまりにも違う現実に、その場で自殺した者もいたという。この歴史的事実を組み入れた言葉と考えられる。この物語は、KaoruがAkiに、自分についてくるなど論じ、幕を閉じる。Kaoruは、Chizukoの苦しみを十分理解し、大切に思っている気持ちの表れなのであろう。当時の一世女性のイメージからかけ離れた、強い女性として描かれたChizukoだが、やはり当時の一世の一人であったのである。

Song My Mother Taught Me 最後にこの中から注目すべき点を考えて行きたい。この作品の時代設定は1935年の夏で、物語は11歳のSachikoによって語られる。Katou一家は農業に従事していて豊かでないまでも、着るものには事欠かない生活をしている。そして他の作品同様に母Hatueは日本に帰ることをひたすら夢見ている。この設定は先の二つの作品と同じである。在る時、Sachikoは母の微妙な変化に気づく。同じレコードを聴いては寂しげな様子を見かけるのである。音楽を聴いて懐かしむ姿を表現しているのも、先の*Music Lesson*と同じである。それから、母Hatueは従業員のYamadaという男性と恋愛関係になるのである。Sachikoの口から語られるYamadaの姿は、父とはかけ離れたおしゃれで身のこなしのよい男性的な魅力のある若者であった。そしてマンドリンを演奏するのである。この男性もKaoruと同じ様に楽器を演奏している。それでは、なぜYamauchiは、これらの登場人物に楽器を演奏させるのであろうか？ おそらく楽器を演奏するということが当時の一世の生活とかけ離れた状況なのである。生活に追われる一世男性と暮らしている女性たちにとって、楽器を演奏する男性は夢の世界の人に感じられる

のであろう。そこでYamauchiは、このような男性を登場させ現実から逃げ出したい一世女性の憧れを強めていると考える。しかし、父はこの男を辞めさせる。理由として次のように考えている。

「父に欠けている東洋的な資質がYamadaさんにはあった。母にとってYamadaさんは日本を確かめる存在だった。—絶えず心に浮かぶ横笛、桜の花、詩、宿命論などを。Yamadaさんが近くにいる時は母の様子がいつもと違っていた。微笑が柔らかく声もやさしくなった。父が嫌がっているのは、Yamadaさん本人ではなく、母のこの変化—Yamadaさんが引き起こす私達家族の変化ではないか、と私は思った。」(Wakako Yamauchi, 松原美恵訳、「母が教えてくれた歌」74)

しかし、Hatueは、Yamadaとの子供を妊娠する。いつか、日本に一人でも帰ろうとしていたHatueにとって夢が打ち砕かれてしまい絶望の中で子供を生む。Sachikoは子育てに気の進まない母に変わってこの赤ちゃんを育てるが、母は、自分の手で殺そうとする。ところが、不注意が原因で赤ちゃんが溺死してしまい罪の意識にさいなまれるようになるのである。この作品では、劇の脚本についてさらに考察していかなければならないが、今後の課題としたい。

このように、劇の中の内容を比較しながら考察することでさらに多くのことがわかるようになった。今まで一世たちの苦しかった生活を描く作品は多く見られたが、劇という形をとることで、一人ひとりの登場人物の心の動きが描写され、当時の苦しみをさらにはっきりと観客に伝わる。日本への望郷の思い、日本を離れアメリカに渡ったことへの後悔、そして「仕方がない」とあきらめて日々を送る人々の姿がとてもよく描かれているのである。

筆者は、この3つの作品を読むことで今ま

で多くの日系文学を研究する中でなんとなくつかんでいた当時の日系社会のイメージをもっとはっきりしたものとしてつかめるようになった。何より一世たちがアメリカ社会で土地を所有できないという外国人土地法にどれほど苦しめられていたか改めて実感した。この土地法のために一世は貧乏な生活が続き日本への帰国を不可能にしたのである。今後もう一度原点に戻り、第二次世界大戦前の日系アメリカ人の歴史的考察もしていきたいと考えている。

おわりに

筆者はこれまで日系二世三世文学者の活動を研究してきた。さらに日系女性の作家の活動にも目を向けてきた。そして Wakako Yamauchi の短編、脚本を読む中で日系アメリカ文学の原点はやはり日系一世の生活を描写することであると再認識した。今後多くの日系三世四世の作家が登場するであろう。そして作品のモチーフは形を変えていくであろう。しかし彼らも時々この原点に目を向けることが大切であろう。自分たちの存在を語る時一世の苦勞なくして、通れないからである。今回は Yamauchi の作品を3つ取り上げたが、今後他の作品にも目を向け、さらに彼女のメッセージを研究していき、それぞれの作品の中からさらに一世の女性に対する Yamauchi のメッセージを受け止めていきたい。

注

1. 筆者はこれまで多くの日系作品を研究してきたが、日系三世の作家による活動が盛んになり、新しいモチーフの作品が多く見られるようになったことに注目している。
2. 筆者はかつて同じ二世の作家、Toshiko Uchida の作品を研究した。Uchida も強制収容所では、苦しい生活強いられたが、両親がキリスト教関係の団体の援助を受けて貿易関係の仕事をしていたこともあり、Wakako Yamauchi の生活環境とは大きく異なっている。そして戦後教師として生活をしたこともあり、作品の対象が児童となるものが多く見られるのである。

Works Cited

- Berson Misha. *Between Worlds*. New York.: Theatre Communications Group, 1990.
- Houston Velina Hasu. *The Politics of Life*. Philadelphia: Temple University Press, 1993.
- Yamauchi Wakako. *Song My Mother Taught Me*. New York: The Feminist Press at The City University of New York, 1994.
- Yamauchi Wakako, *Living in America as a Nisei Writer*, 東京: アメリカ太平洋研究, 2002.
- 今枝麻子. 『ワカコ・ヤマウチ, *And The Soul Shall Dance*』, 東京: 美鈴, 1997.
- 松原美恵. *Wakako Yamauchi, 母が教えてくれた歌*. 東京: グリオ9号, 1995.
- 「ワカコ, ヤマウチの描いた二世女性—*Song My Mother Taught Me* 収録の短編小説を中心にして」, *AAJA Journal* 3号, 1996: 31-39
- 「伝統的価値観からの開放を求めて—ワカコ, ヤマウチ, 『母が教えてくれた歌』から」. 東京: 北星堂書店, 1996: 78-89.

Works Consulted

- Misha Berson, *Between World: contemporary Asian-American plays*, New York, 1990.
- Uno, Roberta, *Unbroken thread: an anthology of plays by Asian American women*, Massachusetts, 1993.
- 遠藤幸英, ジョン・レグイザモ「マンボ, マウス」
Wakako Yamauchi, アメリカ演劇, 全国アメリカ演劇研究者会議, 東京, 1992.
- 原恵理子, *Memory in Science: Wakako*

Yamauchi's *And the Soul Shall Dance and The Music Lessons*, 「東京家政大学研究紀要, 41集, 東京 2001.

古木 圭子, Wakako Yamauchi, *And the Soul Shall Dance, The Music Lessons*における「日本的」イメージと一世女性のセクシュアリティ, 「高知女子大学文化論業」, 高知, 2003, p18~30.
Sexuality and Motherhood In the Issei Mother and Nisei Daughters—Wakako Yamauchi's "That Was All" and Noriko Sawada's "Memoiro of a Japanese" Daughter
“AAA journal 5, 兵庫, 1998, p 1 ~ p 10.